

## 主よ、み心がなりますように

「主の祈り」は、その構造が示すように、徹底した神中心の祈りである。まず神の御名があがめられ、神の御国と支配が実現し、さらに神の御心がなるように、と祈る。原文では「あなたの」という語があり、「あなたの御名があがめられるように」「あなたの御国が来ますように」「あなたの御心がなりますように」と、「あなた」が強調されている。

私たちはしばしば、祈りとは「ああしてください」「こうしてください」と、私たちの願いを神にかなえてもらうことだと考える。確かに私たちは、そのように願い、そのように祈ることが許されている（6：11～13）。しかし、主はこの「主の祈り」において、祈りの本質は、そのように私たちの願いを一方向的に神に語り、神にかなえてもらう、換言すれば、私たちの願いに神を従わせることではなく、むしろ逆に、私たちの願いを、神とその御心に従わせることなのであることを教えられた。

私たちは、祈ったのに祈りがかなえられない、とつぶやく。だから、祈るのはもうやめた、というならば、それはキリスト者の祈りからほど遠い祈りである。それは自己中心の祈りであり、御利益宗教の祈りである。つまり、自分の願い（要求といったほうがいい）を神に押し付けること、神を自分の利益追求の手段として利用する誤った信仰理解に基づくからである。

キリスト者の祈りは、そのように、自分の願いを神に押し付けることではなく、むしろ、神のみ心に一切をゆだねることなのである。「主よ、私は、いま、こういうことを必要としています。あれもこれも必要です」と熱心に求めながらも、最終的には、「しかし、主よ、あなたはすべてをぞ存知であられ、またすべての上に主権を持っておられるお方です。ですから、私の願いではなく、あなたの御心がなりますように」と祈る。祈りつつも、最終的には常に、神のご主権とその善なるご意志にゆだねることなのである。

そのような祈りの最も良い例が、ゲッセマネの園における主イエスの祈りである。全人類の罪を一身に負われて苦悶するメシアとしての激しい祈りは私たちの心を打つ。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい」と激しく祈りつつ、最終的には、「しかし、父よ、わたしの願いではなく、あなたの御心がなりますように」と、父なる神のみ旨にゆだねて、主イエスは敢然と十字架に向われたことをマタイは私たちに告げている（マタイ25：39）。

日々必要とするもののために信仰をもって激しく求めつつも、最終的にはすべてを神のご主権とみ旨におゆだねて従っていく。これがキリスト者の祈りであり、またキリスト者の生き方であることを主はご自身の身をもって示された。私たちがどう祈るかということは、どう生きるかということと同じである。生きることは祈ることであり、祈ることは生きることである。そして、祈りにおいて神にゆだねることを学んだ人は、生き方において神にゆだねることのできる人である。

辛く苦しい状況の中で、私たちの魂はそれからの解放を求めて叫ぶこともあるであろう。しかし、最終的には、すべてのことを最善となるように導き給う神のご主権にゆだねて、信仰をもって生きる、そこにキリスト者の生き方があり、祈りがある。「あなたの御心がなりますように」とはそのような祈りである。